中河原遺跡出土の絵画土器

高村 勇士·川村 和子

1. はじめに

中河原遺跡は、大阪府茨木市郡四丁目、上郡一丁目付近に広がる弥生時代から中世までの遺構や遺物が稠密に認められる複合遺跡である。弥生時代の遺構としては、中期の方形周溝墓などが検出されていることが知られており、既往の報告書等では南側に広がる郡遺跡で検出されている方形周溝墓と一連のものと評価するもの(茨木市史編さん委員会 2014)や、弥生時代中期以降に郡遺跡より派生した集落として成立したと推定するもの(茨木市教育委員会 1992)がある。

平成28年(2016年)度~平成29年(2017年) 度にかけて茨木市教育委員会が物流倉庫建設に伴って実施した一連の調査においても、弥生時代中期の方形周溝墓や、土器棺墓などが複数基検出される一方、居住域の構成要素となるべき溝や土坑、竪穴建物跡なども認められた。これらの調査によって、中河原遺跡の弥生時代における集落の様相が見えつつある。

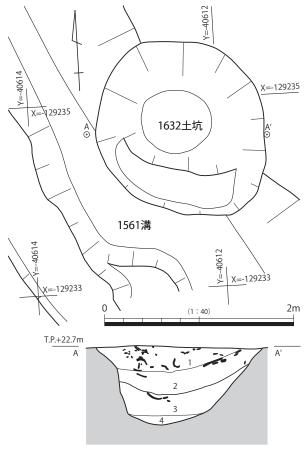
今回の調査では注目すべき遺構や遺物が多く認められているが、とりわけ5棟の高床建物が描かれた絵画土器は類例も少なく重要である。当該資料について周知し、議論の基礎を提供することが本稿の目的であり課題である。 (高村)

2. 絵画土器出土状況(図1)

絵画土器は、調査地北部に設定したD区 1632 土坑より出土した。

調査地は概ね南西から北東に下る旧地形上にある。D区は遺構検出面において西端のみ標高が高く(約 T.P.+23.7m)、その他大部分とは約 1m以上の比高差が認められる。1632 土坑は、西端の高い部分と一段低い部分の境に位置する 1561 溝の東肩を一部切って検出した。

1632 土坑の平面形状は直径約 175 cmの円形で、 検出面より 83 cmの深さを測る土坑である。埋土 は上層と下層に大別できる。上層(1~2層)は ブロック土や土器片が多く、人為的に埋められた と想定できる。下層(3~4層)は自然に堆積し た様子が窺われる。絵画が刻まれた土器片は、上



- 1 10YR3/2 黒褐色細砂混シルト 粗砂少量含む 炭化粒含む
- 2 10YR3/1 黒褐色中砂〜粗砂混シルト 炭化粒含む 木片含む
- 3 10YR3/1 黒褐色シルト混細砂〜粗砂
- 4 10YR4/1 褐灰色細砂混シルト ベースブロック含む

図 1 1632 土坑平・断面図

層より多くの土器とともに出土した。 (高村)

3. 描かれた土器 (図2・3)

線刻のある土器片 9 点は幅 25cm に復元できた。 厚みは 0.5~1.2cm で、うち 2 点(写真 5 右図 b・d)の器壁が厚く、内外面には頸部を示す屈曲が認められることから、これらが壺もしくは甕の頸部から肩部の一部をなすことが分かる。しかし残存する頸部はごく一部であり、器種の確定および、その径や傾きを得るには至らない。いわゆる弥生絵画は壺の肩部に描かれることが多いことから、共伴する広口壺(図 4)のように復元できるものかもしれない。しかし、これら土器片には図 4 の頸部下端にある突帯による装飾の痕跡は見当たらず、法量的にもやや大きくなるようである。 調整は頸部近くの外面に粗いハケ (1cm あたり 5本)を確認できる。内面は全体的な磨滅もあって、指頭圧痕以外の顕著な調整を見ることはできない。色調は外面が浅黄橙色、内面は褐灰色で、外面には黒斑が認められる。胎土には長石、石英、チャートを確認できる。

現時点で確認できる線刻はすべて建物で、5棟(建物 $1\sim5$)を確認できる。このうち建物3が建物2の上部に描かれる以外は、横方向に展開する。横方向に展開する4棟は、それぞれが間隔をあまり置かず、接するかのように近く描かれる。建物それぞれの特徴は次項にゆずり、ここでは高精細デジタル写真画像によって観察できた点について以下に記す。

描かれた線刻はおおむねシャープな線で深く描かれており、肉眼ではこれ以上にわずかな線の差に気づくことは難しいが、高精細デジタル写真画像を観察することによって次のような2点の違いを見ることができた。1点目は比較的浅く描かれる線で、屋根の斜格子に見ることができる。斜格子を描く際の前後関係は、まず右上から左下に向かう線を施して完成させている。この最初に引かれる右上から左下への線は、いずれの建物でもシャープで深い。対して後に引かれる線はこれよりも浅く、特に建物2に顕著である。2点目は建物4(右)・建物5(左)に描かれる千木状の線刻に見ることができる。この線刻は他の線に比して

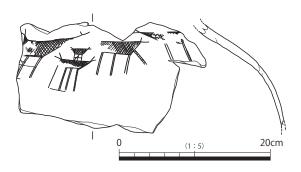
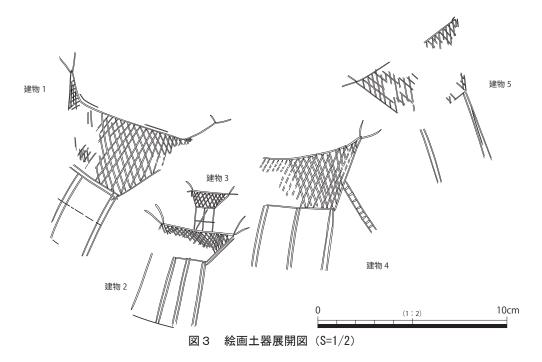


図2 絵画土器実測図(S=1/5)

幅が広く、また浅く描かれる。この幅広くなった 線刻の内側に、いくつかの筋状の痕跡を確認する ことができる(写真4)。

以上のような観察結果は、何に起因するのであ ろうか。一つには線刻に使用する道具の違いによ るものと考えることができるだろう。あるいは道 具を左右どちらの手に持って描いたのかという、 利き手に起因するものと考えることもできる。利 き手によっては深くシャープに刻むことのできる 方向と、それよりはあまくなってしまう方向の違 いが屋根の斜格子に表れていると考えるならば、 描き手が右利きか左利きかを推測することもでき よう。また乾燥の具合も考慮に入れる必要があろ う。浅い線が乾燥の進んだ状態で描かれた結果と 見るならば、描く際の手順を追えることもできる。 さらに描き手が異なる可能性も想定されよう。ま た建物4と5にみられた筋状の痕跡については、 描き進めるうちに道具が消耗した結果、先が割れ て筋状を呈したとも考えられる。そうであれば、



14

線刻に使用した道具の材質を推測する材料ともな ろう。 (川村)

4.5棟の建物 (図3)

5棟の建物はそれぞれに大小や特徴的差異はあるが、いずれも基本的には同様の構造で、斜格子で充填された上辺が長い逆台形の屋根を持ち、屋根に比して長い3本の柱と考えられる二重線がほぼ均等に配され屋根を支える構造である。切妻造の高床建物と考えられる。5棟の屋根には、器面の剥落により確認できない部分を除いて、棟の両端に V 字に 2 本の直線が描かれる。この表現は、「千木」に相当する可能性がある。

建物1は、最も大きく描かれ、棟の反りも大きく表現されている。向かって左端の柱を描いた土器片は検出されておらず不明ながらも、左端の棟先の位置から、建物1についても3本の柱が屋根を支える構造で描かれていたと想定できる。また、高精細デジタル写真画像を拡大して確認すると、非常に浅い線ではあるが柱の中ほどと下端に3本の柱をつなぐ2本の横線が確認できる(写真3)。

建物2については、建物3と合わせて2階建ての可能性も想定される。ただし、この絵画において建物構造上接合している部分については、線刻も接する若しくは重複して表現されているが、建物2の屋根と建物3の両端の柱2本は接して描かれていないことから、本稿においては建物2と建物3に区別する。また、建物2には独立棟持柱が表現されていることが、高精細デジタル写真画像によって確認できる。

最も小ぶりな建物3には、3本の柱の中点を貫くように横線が描かれ、中央の柱の屋根下から左柱下端に向かって斜めの直線が描かれる。この斜めの線刻は梯子の表現の可能性がある。切妻の屋根を持つ建物の梯子については、後述する建物4のように向かって右の妻側に梯子をかけた構図のものが多く知られる。この斜めの直線が梯子の表現であるならば、切妻造で柱間に梯子をかける一例となる。

建物4についても、屋根の中央から左部分については、器面の剥落等により確認できないが、他の建物と同様の構造、表現であったと想定される。また、向かって右側の妻側から梯子がかかる様子が描かれる。表現の方法としては、右下がりの並

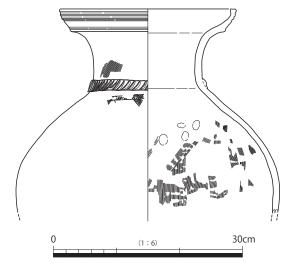


図4 もう一つの絵画土器実測図 (S=1/6)

行する2本の直線の内側にやや扁平な列点を施す ものである。手すりなどの表現は確認できない。 また、構造上梯子のかかる部分に建物の床が存在 すると考えられるが、建物4の梯子は屋根の線の やや中ほどにかかる。

建物5は、中央部の土器片が未検出であり、中央に配置されると想定される柱部分が土器片gとiの接合部にあたり不明であるが、他の建物と同様の構造、表現であったと想定される。

また、現地調査後の知見ではあるが、絵画土器 出土状況時の写真画像を拡大すると、現在把握で きる以上に線刻があるように見える(写真2)。 洗浄等の「整理」を経た現在の状態では確認でき ず、現地においても視認できていないものだけに 甚だ躊躇を伴うが付言しておきたい。写真2には、 土器片e・fが広口壺に貼り付いて出土している 様子が窺われる。このうち土器片e部分には建物 2の下半の柱部分が描かれている。これを現在の 土器片と比較すると、高精細デジタル写真画像を 拡大して確認することができた建物2の独立棟持 柱の線がはっきり認められ、さらにその下端から 3本の柱の下端を通る横線が確認できる。(高村)

5. もう一つの絵画土器 (図4)

出土時に土器片 e・f が貼り付いていた土器にも線刻が認められた。口径 26.4cm、現存高32.4cm を測る広口壺である。やや外開きの短い頸部から、口縁部が一旦外反したのち屈折して立ち上がり4条の凹線文を施す。頸部下端には刻突文を付す。その下には直線で描かれる線刻と、一部には斜格子となる線が見られるものの、磨滅に

よって全容を知ることはできない。調整は全体的な磨滅もあり、ハケ調整がわずかに観察できるのみである。色調は外面が灰黄色、内面は浅黄色である。胎土には長石、石英、チャート、クサリ礫を含む。弥生時代中期後葉の所産と考えられる。 (川村)

6. おわりにかえて

5棟の建物が描かれた土器片は、1632 土坑から共伴する広口壺によって弥生時代中期後葉という一定の時期を得ることができた。また、広口壺自体にも意匠不明ながら線刻画が認められた。この二つの絵画土器片は接合せず、複数の絵画土器が同時期に1632 土坑に投棄されたことが分かる。このことは、絵画土器の廃棄はもとより、その使用について検討する際にも重要な手がかりになるのではないだろうか。今後の課題としたい。

(高村・川村)

謝辞 資料の検討に際し、高精細デジタル写真画像が 大変参考になった。写真画像を自在に拡大することに より、肉眼では確認しえない浅く残った線刻も確認す



写真1 出土状況写真(南西から)



写真5 高精細デジタル写真画像全体(中村一郎氏撮影)

ることができた。高精細デジタル写真資料の有用性を 大いに実感するとともに、絵画土器の写真撮影に御指 導・御配慮いただいた独立行政法人国立文化財機構奈 良文化財研究所の中村一郎氏と深澤芳樹氏に記して感 謝したい。この他、本稿を作成するにあたり、以下の 方々より多くの御指導・御協力を得た。記して感謝申 し上げます。

辰巳和弘、村田幸子、森岡秀人、若林邦彦(敬称略)

参考文献 (五十音順)

茨木市教育委員会 1992「中河原遺跡の発掘調査」『平成3年度発掘調査概報』 pp. 8-22

茨木市教育委員会 2002「中河原遺跡」『平成 13 年度発掘調査概報』 pp. 11-13

茨木市教育委員会 2010「中河原遺跡」『平成 20 年度発掘調査概報』 pp. 15-18

茨木市史編さん委員会 2014『新修茨木市史』第七巻 史料編 考古

大阪府立弥生文化博物館 2018『弥生のマツリを探る』 大阪府立弥生文化博物館図録 64

高村勇士 2018「茨木市中河原遺跡の調査 - 中期の集落 -」近畿弥生の会第 21 回滋賀場所資料集 pp. 49-60



写真 2 出土状況写真拡大







写真4 建物4拡大

